

博物館における平和学習活動の研究

—— 歴史博物館を活用した平和学習 ——

小川 哲哉 *

(2021年6月9日受理)

A study of the peace learning activity in the museum
: Peace learning using the history Museum

Tetsuya OGAWA

キーワード: 博物館、平和学習、戦争、予科練、教員養成教育

戦後日本の学校教育において、平和学習の果たしてきた役割は大きい。平和学習を行う「場」の一つと見なされるのが歴史博物館である。特に広島や長崎の原爆資料館が、戦争の悲惨さを後世に伝えていく重要な役割を担ってきたことは言うまでもない。ところが、こうした資料館に比べると、これまで旧日本軍の施設を保存・保護して歴史博物館にする試みは、必ずしも積極的に行われてきたとは言い難い。本研究では、平和記念館や戦争遺跡をフィールドワークしながら、展示物や展示コンセプトを分析し、歴史的対象への問いかけを行う平和学習の一事例を論究したい。より具体的には茨城県阿見町の予科練平和記念館、雄翔館、霞ヶ浦航空隊跡の戦争遺跡を一体的に取り上げて、教職大学院の授業を通してその教育的意義を捉え直すことに求められる。

問題の所在

平和学習が、戦後の学校教育において重要な位置を占めてきたことは言うまでもない。小・中学校だけではなく高等学校においても平和を探究する学びは今後も途切れることはないだろう。戦争を題材とした児童文学等を活用した国語教育だけではなく、平和憲法を学ぶ社会科教育、さらに特別活動の領域で、原爆の歴史の意味を問う広島や長崎への修学旅行も重要な平和学習の一つである。こうした平和学習に関しては、これまでに膨大な実践的蓄積があると言ってよい。

そして、この種の平和学習を行う際に、重要な文化施設として挙げられるものの一つに歴史博物

* 茨城大学教育学部

館に分類される平和記念館がある。その中で最も重要なのは、「広島平和記念資料館」と「長崎原爆資料館」である。前者は1955年に開館し、人類史上初めて投下された原爆の悲惨さ、凄惨さを伝える歴史博物館として2006年には国の重要文化財に指定された。後者は1955年に開館した長崎国際文化会館の原爆資料センターを引き継ぎ、1996年に資料館として創設された。どちらの施設も「資料館」という名称を付されているが、歴史博物館的な機能を有していることは言うまでもないし、戦争の悲惨さを伝え、平和の大切さを学ぶ場として重要である。

こうした種類の施設とは対照的に、旧日本軍の軍事施設や、そうした施設に関連した建造物や軍事兵器そのものを保存し、それらの歴史的価値を客観的に評価する歴史博物館建設の試みは、必ずしも積極的に行われてきたとは言い難い。とりわけ、そうした施設・建造物、さらには兵器そのものを展示するような公的な博物館等の開設はほとんどなかったと言ってもよいだろう。なぜなら軍事的施設や兵器の歴史的痕跡は平和とは相いれない消し去るべきものであり、逆にそうした痕跡を保存することは戦争賛美につながりかねないとの危惧もあったように思う。

しかしながら、戦争の本質やその現実を検証することなしに、ただ単に平和主義のスローガンを訴えるだけでは、平和の大切さのリアリティを実感化することはできないのではないだろうか。戦争とはどのようなメカニズムで行われ、平和を維持するためには具体的にいかなる方策が必要なのかを検証し、分析することは重要である。単に戦争を忌み嫌い、理想的な平和を訴えるだけでは、より現実的な平和の実現はできないのではないだろうか。今求められているのは、戦争の痕跡を冷静に捉え直し、主体的・対話的に平和の大切さを探究することあるように思う。近年、戦争遺跡や旧日本軍の教育施設の歴史的意味を再確認する試みが進められつつあるし（十菱、菊地：2002年、飯田：2015年、友清：2015年）、そのような試みと連動した平和教育も実践されつつある。

以上のような問題関心に基づいて、本研究では、茨城県阿見町にある「予科練平和記念館」と、その創設に密接な関わりを持つ「雄翔館」、さらに現在茨城大学農学部敷地内にある「霞ヶ浦海軍航空隊施設跡（戦争遺跡）」を一体的に取り上げ、それらの施設へのフィールドワークを行いながら平和学習活動を展開する試みを、茨城大学教職大学院の共通科目「教師のライフステージと資質向上」において行った。まず最初に、歴史博物館の定義から論究を進めよう。

歴史博物館としての平和記念館及び戦争遺跡の事例

周知のごとく歴史博物館は、博物館の一つであり、歴史的な資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及といった諸々の活動を一体的に行う文化施設であり、実物資料を通して人々の教育・学習支援活動を行う施設としても重要な役割を示している。博物館法第2条には、「『博物館』とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクレーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と規定されており、歴史博物館は条文の最初に位置づけられているが、博物館の種類は、歴史博物館だけではなく、産業資料館や自然・科学博物館等多岐にわたっていることが分かる（望月、小川他：2020年：102-103）。2018年度の資料によれば、同法第2条に定める公立・私立の登録博物

館（年間 150 日間以上の開館と館長及び学芸員が必置）の総数は 1,287 館にすぎないが、同法第 29 条で規定されている博物館類似施設（年間 100 日以上の開館と学芸員相当職員の必置）の総数は、4,457 館になっている。

（1）公立博物館としての予科練平和記念館

本研究で取り上げる予科練平和記念館（2010 年 2 月 2 日開館）は、典型的な公立博物館にあたる。阿見町の「予科練平和記念館 個別施設計画」（阿見町：2020 年：3）によれば、同施設は博物館法第 18 条による公立の博物館であり、そのための設置条例としては阿見町予科練平和記念館条例に基づいている。同施設の背景と目的は、以下の通りである。

「予科練平和記念館施設は、博物館法に基づき、近代日本における海軍航空機搭乗員の要請に大きくかかわった阿見町海軍航空隊の歴史と、予科練の姿を次の世代に正しく伝承することにより、歴史への理解を深め、世界の恒久平和の実現に役立てるとともに、地域の教育及び文化の向上並びに地域の振興に寄与することを目的に設置されました。」（引用者：「予科練」は「海軍飛行予科練習生」の略称として使われているので、本研究でも「予科練」はそのような意味で使用する）

阿見町によれば、同施設は、「生涯にわたって学べる環境づくり」施策の中で平和教育を推進する役割を担っており、開館した 2010 年から 2018 年度末までの累計開館日数は、2,782 日であり、入館者数は延べ 525,744 人に上っている。2018 年度に限って言えば、期間限定の特別「企画展示」は 220 日間行われ、37,136 人の参加があったし、平和活動の一環としての講演会や子供を対象にしたイベント等の教育普及活動については 16 回行われ、利用者は 1,796 であった。2018 年度の企画展示や教育普及活動は、以下の通りである（予科練平和記念館HP：2021 年）。尚、2015 年からは海軍の零式艦上戦闘機 21 型（以下、零戦）の実物大模型が展示されている。阿見町では 1944 年から終戦まで零戦が実際に製造されており、その意味では零戦ゆかりの地であり、そうした経緯から予科練平和記念館の開館 5 周年記念事業として、約 3,000 万円の制作費を使って作られている。

・企画展

収蔵資料展「日々を綴れば 阿見町出身の予科練習生」

・教育普及活動

講演会「予科練と私」（元海軍乙種第 15 期 飛行予科練習生 吉田重次氏）

平和祈念コンサート「阿見の夏 阿見の空 あなたを忘れない」

講演会「ノモンハン事件」（元阿見町予科練平和記念館歴史調査委員 戦史研究者 井本潔氏）

講演会「五体を砕きて悠久の大義に殉ず 家族に届けられた 52 通の葉書と手紙が伝える思い」

（第 12 期甲種飛行予科練習生 故海軍少尉 廣嶋忠夫氏の実弟廣嶋文武氏）

映画観賞会「ハワイ・マレー沖海戦」（1942 年東宝映画）

映画観賞会「私の父もそこにいた—証言によるベトナム残留日本兵の存在—」

（ドキュメンタリー自主製作映画 脚本・監督 佐山剛勇氏）

講演会「日露戦争と乃木大将」

（阿見町予科練平和記念館歴史調査員 元武器学校教官：戦史・戦術担当 大橋良一氏）

(2) 予科練平和記念館、雄翔館、霞ヶ浦海軍航空隊施設跡との関係

冒頭でも触れたように予科練平和記念館の開設には、近接している雄翔館が深い関わりがあることを理解しておく必要がある。1968年に開設された雄翔館は、当初「予科練記念館」と呼ばれ、現在陸上自衛隊武器学校（以下、武器学校）の敷地の一角に建設された。同館には、予科練戦死者の遺品や遺書等約1,700点余りが収められた。この雄翔館の隣に雄翔園が建設されたが、雄翔園には予科練習生が全国から集められたことを記念したモニュメントと共に、予科練の戦没者のための記念碑（予科練二人像：予科練戦没者1万9千人の霊壘簿を収納）が建てられている。このような施設建設の中心になったのは公益財団法人海原会であった。海原会は、雄翔館の維持・管理だけではなく、毎年全国の予科練戦没者の同窓等500名の慰霊祭を実施したり、機関誌『月刊予科練』を発行している。雄翔館は、現在予科練平和記念館の開館日と連動して開館しているが、職員は常駐していない。その意味で雄翔館は、博物館というよりも記念館の性格が強いと言えるだろう。現在雄翔館には武器学校の通用門から入門でき、その場合は特別な手続きなしに、自由に入退門が可能となっている。

この海原会は1996年に重要な提案を行った。それは、21世紀の世代にも予科練の歴史と精神を伝えることを目標とした新しい記念館建築の提案である。その際に当初は雄翔館を廃止し、新しいタイプの平和記念公園の中に平和記念館を建設することも考えられたが、2007年には雄翔館を存続させ、新記念館は武器学校に近接する場所に単独で建設することが決まった。この決定により予科練平和記念館の建設が具体化したのである。このような経緯から予科練に関係する二つの施設が隣接して存在することになったが、そもそも二つの施設と武器学校の敷地は、海軍予科練習生を育成した土浦海軍航空隊（以下、土浦空）の広大な敷地とほぼ一致しており、そのため歴史的に見ると同敷地は予科練ゆかりの地であることが分かる。ところで予科練の名称の由来だが、土浦空が昭和15年に霞ヶ浦海軍航空隊（以下、霞ヶ浦空）を実用練習部隊に改編させるため、初歩の予科練習部を独立させる形で霞ヶ浦沿岸の阿見村（当時）への移転を決定するが、その際に霞ヶ浦空の全予科練習生を一手に引き受けたために、土浦空が通称「予科練」と呼ばれるようになったと言われている。

このような経緯で創設された予科練平和記念館だが、その展示方法には極めてユニークな形式を取っている点に注意したい。それは単に予科練の歴史を伝えるだけではなく、当時航空隊の町として知られていた阿見町の歴史とを関連付けながら展示する形式である。例えば7つの展示室は、予科練の制服である「7つボタン」に基づいており「入隊」、「訓練」、「心情」、「飛翔」、「交流」、「窮迫」、「特攻」という7つコンセプトで、当時の若者たちが残していった品物を展示しながら彼らの心情を見つめ直すことができるようになっている。また空襲映像や特攻映像等、視聴覚教材も数多く用意されている。

ところで霞ヶ浦空の方だが、当時土浦空から約1.5km離れた場所に所在していた。現在その一部は、現在茨城大学農学部のキャンパスに使用されており、その敷地内には霞ヶ浦空にゆかりの諸施設が残されている。それが、「士官宿舎階段親柱」、「方位盤」、「軍艦旗掲揚塔」である。航空隊の元の敷地は現在の農学部キャンパスをはるかに超える広大な場所であったが、当時の面影を残すのはこの三つの施設跡しかない。予科練平和記念館が開館した1か月後の2010年3月には、この三つの施設跡が、阿見町の町指定文化財に登録されることになった。先ず士官宿舎階段親柱だが、これは霞ヶ浦海軍航空隊の第一士官宿舎の2階に通じた階段に設置された4本のうちの2本であり、柱

頭にはヨーロッパ様式の彫刻が施されている。次のコンクリート製の方位盤は、目印のない空の上でもパイロットが方角を認識するための地上訓練に使用されたものであり、360 度の目盛が刻まれている中に著名な町や地点が記されているとのこと。さらに軍艦旗掲揚塔は、海軍軍艦旗が掲揚された場所であり、極めて神聖な所である。朝 8 時から夕刻 5 時まで掲げられ、掲揚の際には直立不動で敬礼が当然義務づけられた。

このように、予科練平和記念館及び雄翔館、そして茨城大学農学部の中の三つの戦争遺跡は、密接な関係を持っており、これらの教育資源を活用すれば極めてユニークな平和学習活動が展開できるように思われる。以下に示すのは、茨城大学教職大学院共通科目「教師のライフステージと資質向上」の中で行われたフィールドワーク活動による教育実践の記録である。そのため参加学生は、教職 10 年経験者の教員とストレートマスターであった。

フィールドワーク活動を活用した平和学習活動の試み

本科目の学習活動では、事前指導とフィールドワーク活動の 2 日間と、事後の自学自習による課題レポートの作成の形式を取っている。ただ、2020 年度はコロナ問題でフィールドワーク活動ができず、オンライン授業になったため、ここで紹介するのは 2019 年度の実施記録（7 月 30 日、8 月 7 日）と、課題レポートの分析である。

（1）歴史的対象の解釈とフィールドワーク活動の方法に関する事前指導

1 日目（7 月 30 日）の事前指導では、歴史的対象を解釈する方法を学びながら、歴史博物館の展示資料と展示コンセプトを分析し、そこから読み取れる戦争や平和概念の論究方法を考えさせた。そのため、講義だけではなく、演習も組み入れている。参加学生 16 名は 4 つのグループ（各グループ 4 名）を作ってグループワークを行い、その成果を発表した。

午前中の講義で強調した点は以下の二点である。

①歴史的対象への問いかけとその解釈

太平洋戦争という歴史的対象は、どのように解釈すればいいのだろうか。この戦争が、アジアの諸民族の解放を標榜しながら、本当の目的は南方の資源確保や人的掌握であったことから、侵略戦争の側面を持っていたことは否定できない。しかも、この戦争では日本軍人はおよそ 230 万人、一般人は 80 万人が死亡し、主な対戦国である米国でも 40 万以上の人が亡くなったという事実は、戦争の悲惨さを如実に示すものである。さらに原爆投下によって広島では 16 万人以上が、長崎では 15 万人近くが 1 年以内に亡くなった事実も忘れてはならない。こうした事実を後継世代に伝えていくことは平和学習にとって重要な課題である。

ただ、ここで注意したいのは、このような数字的記録や歴史的事実を理解したとしても、それだけで戦争の本質を理解したことにはならない点である。今でも残されている戦争史料、証言記録、戦争遺跡などの歴史的対象は、あくまでも戦争の記憶の一断片にすぎず、それ自体を単に読んだり、見たりすれば何か語りだすわけではない。我々が諸々の歴史的対象から戦争の本質を理解しよう

とするならば、歴史的対象に対して積極的な問いかけを行い、その歴史的意味を主体的・対話的に理解していく姿勢がなければならないだろう。我々は今日的視点から歴史的事実を「再構成」して、その意味を再解釈し、その妥当性を検証していかなければならないのである。

そのため近年注目されている戦争遺跡の保存や保護の動きや、歴史博物館としての平和記念館が相次いで創設されていることは、歴史的対象を新しい視点から捉え直し、戦争と平和の本当の意味を問い直す試みであると言ってよいだろう。

②予科練平和記念館、雄翔館、霞ヶ浦空跡の三つの施設をフィールドワークする意味

すでに明らかにしたように、予科練平和記念館は歴史的博物館であるし、雄翔館は特攻で命を落とした若人たちの鎮魂の記念館になっている。さらに霞ヶ浦空跡の三つ施設は、そこがかつて軍の施設であったことを示す歴史的痕跡となっている。ただそこに収蔵されている展示物や建造物等は、単なる歴史的対象にすぎないものであり、それを観察しただけでは、それぞれが持っている歴史的意味を理解することはできない。重要なのは、それらの存在を問いかけ、それが有している存在意味を探究することである。そのための一つの手法として注目されるのが、フィールドワーク活動である。

そもそもフィールドワーク活動とは、特定の調査対象を研究する際に現地を実際に訪問し、その対象を直接観察したり、聞き取り調査等を行ったりしながら、現地でしか採取できない史料・資料の意味を明らかにする活動である（佐藤：2006：32）。ただ、今回の調査対象で特徴的なのは、その対象が、戦争や平和に関する様々な記録物が収蔵され、展示している記念館であったり、歴史的な建造物としての戦争遺跡である点だ。そのため重要なのは、単に記念館の学芸員等からレクチャーを受けたり、聞き取りを行うだけではなく、さらにそれぞれの収蔵品や展示品、建造物をどのように歴史的に説明しているかに注目し、その説明方法の妥当性を検証することである。なぜなら、その説明の仕方は、歴史的「再構成」されたものに過ぎないし、説明する側の意図に基づいた構成がなされているからである。そのような観点から、歴史的に再構成された予科練という組織や、そこで生活した若者たちの映像や記録や証言に対して、各自が強い問題関心を持ちながら問いかけることは重要である。そのような姿勢でフィールドワークを行わないと、記念館の展示物や展示コンセプトが持っている特定の意図や、戦争遺跡が持つ歴史的意味を真に理解することはできないように思われる。そのため受講生各自には、フィールドワーク活動の際に、展示物や展示コンセプトの意図や傾向性をあらためて問い直し、戦争遺跡に対する歴史的意味づけを自ら再解釈していくように指導した。

参加学生たちは、図書館での文献や、インターネットによる検索を通して、予科練平和記念館や雄翔館等を調べ、二つの施設に関する知識を深め、ホームページ等でフィールドワークを行う施設のイメージを膨らませ、両施設の違いを事前学習した。

(3) フィールドワーク活動の内容と分析

二日目（8月7日）のフィールドワークは次のような日程で行った。

8：30 茨城大学事務局棟前 集合（マイクロバスにて阿見町へ）

10：00 現地到着

予科練平和記念館から雄翔館をフィールドワーク

13:00 茨城大学農学部へ移動

霞ヶ浦海軍航空隊跡（阿見町指定文化財）の三つの歴史的文化財を見学

「士官宿舎階段親柱」、「方位盤」、「軍艦旗掲揚塔」

農学部講義棟 101 教室にてフィールドワークの「検討会」

フィールドワークで気づいたことをグループワークして、発表する。

DVD『決戦の空へ（1943年度作品）』（東宝：2006年）の分析と討論

17:50 茨城大学に到着

①予科練平和記念館のフィールドワーク

2010年に開設した予科練平和記念館は、「ディスプレイデザイン賞2010」大賞や「JCD デザインアワード2010」金賞を受賞するなど極めてモダンなデザインになっている。展示方法も、単に史料や備品を展示するだけ配置ではなく、予科練で過ごした搭乗員志望の若者たちの学校生活の日常が、リアルに感じ取ることができるようにつくられている。そのため入場者は、予科練に合格した若者たちと同じ目線で入隊から卒業までの生活を実体験できるようになっている。

すでに説明したように、予科練平和記念館には7つの展示室があり、それぞれ展示1「入隊」、展示2「訓練」、展示3「心情」、展示4「飛翔」、展示5「交流」、展示6「窮迫」、展示7「特攻」で構成されているが、入館して真っ先に注目されるのは、土門拳氏が海軍省から依頼されて、1944年に予科練を訪問した際に撮った大きなスチール写真が壁に設置されていることである。壁面に掲示されている若者たちの多くの写真からは、予科練生の日常生活の具体的なイメージ化ができるようになっている。

展示1「入隊」では、予科練の選抜試験問題のオリジナルが展示されている。時には約70倍の高倍率なることもあり、制服の「七つボタン」と「桜といかりの記章」は少年たちのあこがれの的であったことが分かる。展示2「訓練」では、起床から就寝まですべてが訓練漬けの日々で、肉体と精神を極限まで鍛えていく様子がイメージできる。興味深いのは、机や就寝道具のハンモックが当時の状態のままに展示されている点である。展示3「心情」には、日記や、親族との書簡の読むことができ、今と変わらない14～17歳の少年たちの多様な気持ちの変化を見て取ることができる。展示4「飛翔」では厳しい訓練を終え、「予科練習生」たちが「飛行練習生」となり、操縦員か偵察員の進路が決まる試験と、新たな訓練基地に向かう一連のプロセスが展示されている。展示5「交流」では、予科練生たちの外出の様子が展示されている。日曜日には指定食堂や一般家庭への訪問が許されており、当時の阿見や土浦の人々との交流が分かる。日頃の厳しい訓練から解放され、つかの間の休養に浸る彼らの表情には、若者たちのあどけない姿が見て取れる。その他、当時の一般庶民が実際に使用した様々な生活必需品（お札やポスターなど）が展示されており、戦時下の暮らしの様子が分かる。展示6「窮迫」では、1945年6月10日日曜日に行われた阿見町の空襲の状況を紹介している。展示室の天井や壁面に映し出される映像は、予科練習生だけでなく、多くの庶民が命を落とした空襲がリアルに体験できる構成になっている。一角に展示されている爆弾の破片は、ずっしりと重く、それらが四方八方に飛び散る恐怖を感じられずにはられない。展示7「特攻～戦時下の悲劇～エピローグ」では、平和な今では考えられない非情な攻撃「特別攻撃(特攻)」がテー

マである。特攻で命を落とした戦死者の7割が予科練習生であった事実とその数は約18,000人であり、それと同じ数の光が浮かび上がる展示は圧巻である。こうした若人の多くの犠牲を払いながら戦後の混乱期を乗り越え、高度経済成長を経て復興を果たした日本だが、世界にはいまだに平和を獲得できていない国もあることを忘れてはならない。このように過去を知り、未来を見つめていくことの大切さを考えることが予科練平和記念館のメッセージであることを示しながら展示が終了する。

こうした一連の展示室で、多くの参加学生たちが一番長く見学していたのは、展示3「心情」の部屋であった。そこには、日記や親族との書簡のやり取りをまとめた冊子と椅子と机があるだけだが、それを読みながら予科練習生の心の内側に入り込むことは、参加学生たちの心情を強く揺さぶったようである。フィールドワークの感想には、「今の少年たちと変わらない心の動きにほっとした」「少年たちが一生懸命に何かに取り組む姿勢は今も昔も変わらないことが分かった」「等身大の予科練生たちが分かってよかった」との意見が寄せられたが、一方で「こうしたあどけない少年たちの情熱が戦争に利用されたことは許されないと思う」「あれだけ努力して一人前のパイロットになったのに、命を失うことがはっきりしている特攻に疑問を感じた」等の意見があった。

②雄翔館のフィールドワーク

近接する雄翔館は、陸上自衛隊の武器学校の敷地の一部に入る必要があるため、守衛所の自衛隊員の許可を得て入館する。旧式だが実際に使用された戦車が屋外に展示されており、予科練平和記念館とは違った雰囲気を醸し出している。

しばらく歩くと左側に雄翔園と記念碑が見える。入館者は、まず入口正面にある山本五十六の銅像に出会うことになる。基本的に入場無料で担当者も通常はいないので、自由に入ることができる。入ってすぐに気づくのは、館内を説明するアナウンスとそれに合わせて軍歌が流れていることである。軍歌はハーモニカ等による哀愁に満ちた曲が主であり、戦没者を弔う雰囲気が鎮魂の記念館であることを自覚させてくれる。その意味で、予科練平和記念館とは異なるコンセプトの記念館であることが分かる。

参加学生たちは、事前学習で調べたことに基づいて雄翔館の展示物に自ら問いかけることになる。雄翔館の展示物は海原会によって整理されており、基本的なものは予科練出身の戦没者の遺影と遺書が中心である。年々新しい資料が少しずつ加えていることが分かる。他には鉢巻、恩賜の煙草や時計などの遺品の展示物や、予科練出身者が操縦したと思われる旧海軍航空機や艦艇の模型も展示されているが、数年前からは米国の代表的な戦闘機や爆撃機の模型も展示されることになった。その意味で模型のコレクションは年々充実している。

フィールドワークでの感想は以下の通りである。「特攻で亡くなった搭乗員の多くが予科練習生であったことに衝撃を受けた」「特攻の多くが失敗している歴史的事実から、多くの船舶を撃沈すると書いた遺書にむなしさを感じた」「少年のような若者が数多くいたことにショックを受けた」「彼らの犠牲を、我々は果たして生かしているのかどうか、あらためて考えてしまった」等の意見が多かった。ただ、その中には鎮魂の記念館だとは言っても「彼らの死を単に感傷的に見てしまうだけで、本当に戦争や平和の本質が分かるのか疑問を持った」「感傷に浸ってばかりいては戦争や特攻の本当の意味は分からないのではないか」「鎮魂の雰囲気に幻惑されてはいけない感じがした」等々の

意見もあった。参加学生たちは雄翔館を、予科練習生だけではなく遺族の関係者たちの墓標的シンボルとして重要な施設であるとの印象を持ったようだ。

③霞ヶ浦空跡の三つの施設のフィールドワークと検討会

茨城大学農学部へ移動後に、「士官宿舍階段親柱」、「方位盤」、「軍艦旗掲揚塔」の見学を行った。事前学習で確認したように霞ヶ浦海軍航空隊の当時の敷地は、現在の農学部の敷地をはるかに超える広大なものであったが、今はたった三つの施設跡しか残っていない。この点については、参加学生たちには大きな驚きを持って受け取られ、同時にこれら施設跡だけで当時の状況を想像し直すことは難しかったようだ。

フィールドワークの後は、1943年に製作された東宝映画『決戦の空へ』（東宝：2006年）のDVDを分析した。この映画は、予科練を宣伝する国策映画であり、当時の土浦空の様子を映像として確認できる貴重な映像資料である。この映画の第一の目的は、予科練への志願者を倍増させることであつたと言われている。基本的なストーリーは、主人公の少年が、外泊する予科練の訓練生たちからのアドバイスを受け、予科練を訪問し、自らも予科練の試験を受けて合格するまでの過程と、日々訓練に励む練習生たちの日常生活を紹介する勧誘映画になっている。中でも注目したいのは、当時予科練の歌として知られていた『若鷺の歌』のエピソードも織り込まれている点であり、この歌は当時の青少年たちに大きな影響を与えたといわれている。

このDVDの視聴と分析を通して、院生たちは予科練に志願させるための国策映画という観点からの感想を出し合い、映像として作られた予科練に対するイメージについて討議活動を展開した。出された意見は以下の通りである。「国策映画とは言っても、当時の海軍の制服にあこがれる若者たちの感情は、今もカッコよさに憧れる若者たちの感情と同じではないかと思った」「76年も前の映画なのに、若者の情熱と努力が今も昔も変わらない気がした」というような意見が幾つか見られた。しかし多かったのは、「特攻した予科練出身者を賛美し、死に対する無感覚な意識を説明する教官の指導に恐ろしさを感じた」「今回雄翔館、平和記念館、そして三つの施設跡を見学して後に、この映画を見て、戦争の真実を知らずして予科練に入隊することの恐ろしさを感じた」「予科練への勧誘映画であり、真実を隠蔽した映像の問題点を理解することができた」等、戦争の真実を見せないようにする教育活動の恐ろしさに対する指摘であつた。

(4) 自学自習による課題レポートの分析と評価

事前指導を受け、フィールドワークを行った2日間の学習活動に基づいて各参加学生たちは、自学自習によるレポート課題に取り組んでいる。紙面の都合上、全てのレポートの内容を紹介することはできないが、三つの歴史的対象への主体的・対話的な問いかけによって、戦争と平和の問題を客観的かつ冷静に分析したレポートが多かつた。

参加学生たちは予科練平和記念館や雄翔館の展示から、予科練生たちにも今の若者たちと変わらない目標達成に向かう情熱や意欲があつたことを確認し、予科練の若者たちの日常生活における同時代的意味を論究していた。すなわち、予科練の日常を今日的視点から軍国主義的教育施設であるとして全否定するのではなく、彼らの目標達成や勉学への強い意欲それ自体は評価することである。だが結論的に言えば、予科練の若者たちの誠実な情熱や意欲は、国家に利用され、国家の道具とし

て使われたことは否めない事実である。しかも「彼ら自身は、そのように利用され道具にされていたことに気づけなかったのが、彼らにとっての最大の悲劇であった」との指摘もあった。

また、展示7の展示コンセプトに対しても幾つかの意見があった。確かに、特攻によって訓練生の多くの尊い命が失われ、戦争の犠牲者になったことは事実である。しかしながら、そのようなコンセプトによって彼らを戦争被害者のシンボルに奉り、彼らの遺書等を「戦争を繰り返さない」「平和尊さ・大切さ」の象徴的なメッセージとしてしまうことは、ある意味で戦争の真実を隠すことにはならないかというレポートもあった。そもそも今日多くの史料が示しているように、米国にとっては特攻が軍事的には全く効果のない無意味な作戦だった。事実、米国の正規空母は一隻も沈められていない。その理由は、「多くの特攻機が、米軍の最新のテクノロジー（レーダー、VT信管）によって体当たりする前に撃墜されていた」からである。特に米国は、VT信管のノウハウを大戦前から持っており、沖縄戦の時期には全ての艦艇に装備完了しており、そのため沈められた艦艇は全体の1～3%に過ぎなかった。しかもこの事実が、戦後まで日本側には全く知られていなかったと言われている。したがって「なぜ特攻の目的を果たせずに自らの命が失われていくのか」を知らないまま死んだ若者たちが多数いたことは明らかであろう。そしてそれが意味するのは、彼らは最後まで自国の運命をどのようにして担うのかの議論を行えないまま命を落としていったことである。こうした事実こそが、特攻の大いなる悲劇であると言えるのではないだろうか。もちろん展示7の展示コンセプトのように、特攻で失われた尊い命を戦争の犠牲と見なし、戦争の悲惨さと平和の大切さを強調することが重要であるとは言までもないが、そのような展示コンセプトでは、失われた尊い命を感傷的に理解させるだけで、戦争の真実、特に特攻の真実が十分に説明されないことにもなり得る。ただ、公立の博物館の展示コンセプトにそこまでの構成を求めることができるのかどうかは意見が分かれるところであろう。

以上のようなレポートの指摘は、事前指導時の発表では全く見られなかったものであり、参加学生たちはフィールドワークで得られた知見から、歴史的対象物に対して問いかけを行い、その意味を主体的・対話的に見いだしていこうとしたことが分かる。このように参加学生たちは、予科練生たちの日常生活の同時代的意味を確認しながら、特攻を単に感傷的な悲劇として理解するのではなく、今日的な視点から見ていかに理不尽で、意味のない作戦であったことをリアルに実感化しているように思う。

学芸員の立場から見た平和教育・学習インタビューより

先に指摘したように、予科練平和記念館は典型的な公立博物館であり、阿見町の教育委員会が管轄する施設になっている。組織内容としては、管理運営、予算決算、財産管理、広報、庶務を担当する管理係と、資料収集、調査、発表、展示、講演会、各種イベント運営、ホームページ、学芸を担当する学芸係で構成されている。正職員扱いの2名の学芸員が、常設展や特別展の企画を行っている。今回、上述したようなフィールドワークに対して学芸員の立場からのご意見を、インタビューを通して頂くことができた。お答え頂いたのは、学芸員の豊崎尚也氏と山下裕美子氏である（インタビューは、2021年5月21日にZoomにてオンラインの実施となった）。

(1) フィールドワークに対する見解

まず豊崎氏から「予科練平和記念館は、歴史文書館とは区別される博物館であるため、単に収集・保管している歴史的資料等を展示するだけでなく、それらを展示して予科練の実態を伝えることに努めている」との見解が示された。ただ「どうしても展示する側の意図が入るので、それを極力排して公正な展示を行うことの難しさがある」とのことだった。

山下氏からは、「学生の皆さんが、フィールドワーク前と後では予科練平和記念館の展示物への見方・考え方が大きく変わっている点に驚かされた」との感想をいただいた。また、学生のレポートの中で示された「特攻の失敗の真実を教える必要性もあるのではないか」との意見に対しては、「基本的に展示物をどのように解釈するかは、訪問者の自由に任せているのが本館の基本姿勢であり、公立博物館として特攻という歴史的事実を淡々と紹介しながら、戦争を知らない若い世代に歴史の真実を伝えていくことが重要であると考えている」との回答を得た。特に、予科練に関する軍事的価値を伝えることについては、公共施設として中立的な立場を堅持する必要性が示された。ただ、予科練平和記念館の開館からすでに10年を超えているので、「特攻に関する新しい研究や知見を活かして、より多角的に予科練を考える必要がある」との認識も示された。

(2) 平和教育・学習に対する見解

両氏とも「予科練平和記念館は、公立の博物館であることから特定の思想やイデオロギーに偏らない平和教育・学習を目指すことが求められている」と述べ、そのような教育・学習活動を進めて行くことの重要性が指摘された。ただし、山下氏からは「今日、小・中学校生及び高校生だけではなく、彼らの親たちも全く戦争体験がない世代なため、予科練とは何であったのかを教えることが非常に難しくなっている」ことが問題にされ、そのため予科練を使ってどのような平和教育・学習を行うのかについては、なかなか有効な教育方法が見いだせずにいることが指摘された。

このような見解からは、公立博物館が行う平和教育・学習の困難さが確認できるように思う。さらに、予科練平和記念館のような旧軍事教育施設を取り上げている歴史博物館の場合、その難しさはさらに大きいと言える。

(3) その他

豊崎氏、山下氏からは、上述した以外にも公立博物館である予科練平和記念館ならではの問題や課題が出された。

その一つ目は、記念館は開館10年目を迎えて、施設設備等の老朽化の問題が出ていることである。外壁の劣化や照明の取り換えの問題など、施設維持のための予算が厳しい状況にある。その際に、財政支援や人的支援の面での民間活力導入については、「予科練平和記念館の性格上、展示コンセプトに民間企業が求める娯楽性を持たせることは難しいし、エンターテインメント的な要素を出すことによる収益増加を図ることも難しい面がある」とのことであった。

さらに、観覧料金の値上げ問題については、「本来教育施設であり、予科練の歴史を伝えることを使命としている施設なので、当初は無料とする案もあったが、最低限の観覧料金（一般500円、小・中・高300円、その他減額措置もある）を取ることで了承された経緯がある」とのことであった。

観覧料金の問題は、補修とリニューアルの必要性を抱え、予算の増額を求めている多くの歴史施設等に共通する問題である。近年、予算削減が求められている公立博物館に収益性を持たせるため、娯楽性を加味したエンターテインメント活動による観覧料増大を図る事例も増えている。ただ、これまで歴史・文化的価値の保全を重視してきた公立の博物館が、民活導入による収益性の向上を図ることについては、まだ議論が分かれているように思う。予科練平和記念館の場合には、その展示コンセプトの性格上さらに難しい判断が求められる。

おわりに

お二人の学芸員の方へのインタビューを通じて、「予科練平和記念館は公立の博物館であることから、特定の思想やイデオロギーに偏らない平和教育や学習を目指すことが重要である」との見解は、展示コンセプトに深く関わる問題であり印象に残った。ただ、終戦から76年も過ぎ、戦争体験の全くない世代が大半になった今日、予科練という存在を伝えるためにどのような展示コンセプトを考えて行けばいいのかの難しさも感じられた。特に旧軍事教育施設である予科練の場合は、その難しさは大きい。

昨今、平和学習を行う歴史博物館で、展示コンセプトを変えていく試みも増えている。そこには、ヨーロッパを中心に戦争跡地や、災害被災跡地等の人間の死や苦しみ、悲しさを対象とした「ダークツーリズム (Dark Tourism)」が広がりを見せていることも背景にあるだろう (井出：2018年)。中でも展示コンセプトの大幅に変更した代表例としては、広島平和記念資料館がある。志賀によれば、平和資料館は2019年に大幅な展示コンセプトの更新を行い、原爆の資料を展示するものから、被爆者の目線に立ち、原爆の投下によって広島から「奪い去られたもの」を感じてもらえるようなコンセプトへの変更がなされたと言う (志賀：2020年：32)。従前は、被爆の現状の展示と共に原子力の平和利用の展示が併設されていた事実もあったことから見ると大きな変更であった。この事例は、公共施設としての歴史博物館の展示コンセプトの公平さがいかに難しく、その時々時代の影響をいかに受けるのかを物語ってくれているように思う。これは、博物館の展示コンセプトは、設置者と利用者とのバランスの難しさであり、相互矛盾の隘路に陥る問題であると言えるのかも知れない。

そのような隘路に陥らない一つの方法として、本研究が論究してきた展示品や展示コンセプトの意味を主体的・対話的に探究する学習活動であるように思われる。そのような学習活動では、博物館は、何かを分かる存在ではなく、何かを感じながら、その意味を考え、学習者自身の探究活動を深めて行く存在になるのだと思う。

繰り返し指摘してきたが、博物館の史料や記録、戦争遺跡等の歴史的対象は、それだけを調べただけで何か語られるわけではない。大切なのは、そのような歴史的対象に対する問いかけであり、それによって同時代的理解を行いながら、その歴史的意味を今日的視点から「再構成」し、新たな理解を進めて行くことであろう。歴史博物館へのフィールドワーク活動の重要性は、まさにそのような点に見いだされるべきであると言ってよいだろう。

参考・引用文献

阿見町「予科練平和記念館 個別施設計画」2020年。

(http://www.town.ami.lg.jp/cmsfiles/contents/0000003/3434/kobetsushisetsukeikaku_yokarennheiwakinennkan.pdf : 2021年5月3日閲覧)

飯田則夫『大日本帝国の戦争遺跡』ベストセラーズ、2015年。

井出明『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎新書、2018年。

佐藤郁哉『フィールドワーク 増補版一書を持って街へ出よう』新曜社、2006年。

志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』岩波新書、2020年。

十菱駿武、菊地実編『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房、2002年。

友清哲『一度は行きたい「戦争遺跡」 北海道から沖縄まで、“戦時”遺構を歩く』PHP文庫、2015年。

福島在行「平和博物館で/から学ぶということ」竹内久顕編『平和教育を問い直す一次世代への批判的継承』法律文化社、2011年。

望月厚志、小川哲哉他著『生涯学習支援の基礎理論と実践の展開』青簡舎、2020年。

予科練平和記念館HP (2021年)。

(<https://www.yokaren-heiwa.jp/> : 2021年5月4日閲覧)

DVD『決戦の空へ (1943年度作品)』2006年、東宝株式会社。